

## ジャック・デリダ没後 10 年

# はじめに

## 西山雄二

フランスの思想家ジャック・デリダ(1930-2004年)が死去してからこの10年間で、その研究は著しく進展している。カリフォルニア大学アーヴァイン校およびフランスの現代出版資料研究所(IMEC)で貴重な資料が保存され公開されることで、未公開の重要資料が研究対象となった。また、デリダのセミナー原稿や詳細な伝記の出版、研究書の公刊など、出版物の量も増大している。そして、国際会議 *Derrida Today* が隔年で開催され、デリダ思想をめぐる国際的な研究活動は活発化している。日本での状況に関しては、デリダの没後、長らく翻訳されていなかった主著が次々に翻訳された。初期の重要な論集『哲学の余白』、『散種』、中期の実験的著作『絵葉書』、そして、脱構築の政治的な介入が示される『マルクスの亡霊たち』、『ならず者たち』などである。デリダを日本語で読める環境がますます充実し、若手研究者も増えている。

没後10年の節目にあたる2014年は、世界各地で国際シンポジウムが開催され、刊行物や翻訳、雑誌特集が多数出版された<sup>1</sup>。筆者は平成26年度首都大学東京傾斜的研究費学長裁量枠(ミニ研究環)「ジャック・デリダの脱構築思想の国際的共同研究」の助成を受けて、各地での催事に参加し、研究交流をおこなった<sup>2</sup>。本紀要の

<sup>1</sup> ジャック・デリダ没後10年を振り返る文献として、藤本一勇・西山雄二・宮崎裕助「ポスト・デリダに向けて」『読書人』2015年2月20日号、西山雄二「ジャック・デリダ アーカイブの未来へ」『思想』No.1090、2015年4月号を参照。

<sup>2</sup> 筆者・西山雄二が今年度執筆して公刊された、あるいは公刊予定のデリダに関する論考は次の通りである。

— « Ouvrir "l'Association pour la déconstruction" », *Rue Descartes*, n° 82, (In)actualités de Derrida, 2014/3.

— 「世界の終わりの後で——晩年のジャック・デリダの黙示録的語調について——」、『思想』No.1088、2014年12月号。

— 「訳者解説」、ジャック・デリダ『獣と主権者I』西山雄二ほか訳、白水社、2014年。

— 「超一主権的なWaltenの問いへ——ジャック・デリダ『獣と主権者II』をめぐる覚書」、『現

デリダに関する一連の論考はこの傾斜的研究費の研究成果である。筆者が海外で参加したデリダ関連の催事は以下の通りである。

- 1) ワークショップ「民主主義の問い——デリダ／ランシエール」(Journée d'étude: La question de la démocratie: Derrida / Rancière) 2014年3月29日 Maison Heinrich Heine, Paris 主催=国際哲学コレージュ、立命館大学
- 2) 第4回 Derrida Today 会議 (4th Derrida Today Conference) 2014年5月28-31日 Fordham University, New York
- 3) 国際シンポジウム「ジャック・デリダ没後10年」(International Conference: Commemorating the 10th anniversary of Jacques Derrida's death) 2014年9月27日 上海交通大学 (Shanghai Jiao Tong University)、上海 主催=上海交通大学哲学科および欧洲文化高等研究院
- 4) 国際シンポジウム「来たるべきデリダ——開かれた問いの数々」(Colloque international : Derrida à venir, Questions ouvertes) 2014年10月1-4日 高等師範学校、パリ 主催=パリ高等師範学校、現代出版資料研究所
- 5) 国際シンポジウム「彼がどこにしようとも、デリダと共に思考する」(Colloque: Penser avec Derrida, où qu'il soit) 2014年12月11-13日 現代出版資料研究所 (IMEC)、カーン、フランス 主催=国際哲学コレージュ、現代出版資料研究所

筆者が実際にこれらの催事に参加して、深く感銘を受けた発表原稿、筆者が交流した研究者の既刊論考を六篇選出し、許可を得た上で本紀要にて翻訳をおこなった。

また、傾斜的研究費による企画として、ブルガリアの卓越したデリダ研究者ダリン・テネフ (ソフィア大学准教授) 氏を招聘して、連続セミナーを実施した。本紀要には、「猫、眼差し、そして死」(2014年12月3日、首都大学東京)、「デリダにおける贈与と交換(Derridative)」(2014年12月5日、立命館大学)が収録されている。

---

代思想』2015年2月臨時増刊号。

— « Quelle voix pédagogique reste-t-il des livres de Jacques Derrida ? », *Quadranti - rivista internazionale di filosofia contemporanea*, Vol. II, N° 2, 2014.

— « Après la fin du monde: d'un ton apocalyptique de Jacques Derrida », *Études sur la pensée française*, Shanghai Jiao Tong University, 2015. (刊行予定)

— « La khôra comme la question de l'éducation : la lecture derridienne du *Timée* », *Rue Descartes*, 2016. (刊行予定)

前者の講演に対しては、大杉重男、南谷奉良、山本潤の各氏にそれぞれの専門分野から有益なコメントを寄せていただいた。ダリン氏の充実したセミナーを基点として、人文社会系の専門分野の垣根を越えた、比較文学的なアプローチの魅力が反映されたものとなった。

翻訳に関してはとりわけ若手研究者の方々に依頼したが、どの訳者も迅速かつ的確に翻訳原稿を作成してくれた。毎年ルーティン化している大学の紀要の存在意義は往々にして曖昧だが、このように若手の初々しい貢献によって紀要が充実し、また、若手にとってのインセンティブになることは実に理想的である。みなさんの参加に心より感謝する次第である。

(西山雄二 = 首都大学東京准教授)